中学の部《優秀賞》

「『車輪の下』を読んで」

中学二年　安河内　瞳

私ははじめ、この作品の主人公、ハンス・ギーベンラントを自分とは「違う人間」として見ていた。

彼は小さな村で神童とまで噂され、周囲からの重い期待を一身に背負い、猛勉強の末に二位という成績で神学校に入学した。学校の模範であり、期待の星であるハンスという人物は、私から見てとても遠い存在に感じられた。学校で授業を受けた後に、校長先生の特別授業を受け、帰ってきてからも夜更けまで机に向かい、休みもせず黙々と勉学に励むハンスの姿は、世間から見ても、特別真面目な秀才に見えるだろう。

そのような中、ハンスはハイルナーという自由人で文学に憧れる人物と出会う。彼は学校の規律に反抗する、周りから見れば「問題児」であった。いわば、ハンスと対極にいる人物である。しかし、ハンスは彼と出会い、友情を結び、文学の美しさ、自由に感情に身を任せる生き方を知っていく。自然を愛し、詩を綴りながら空想の世界を創ってゆくハイルナーと共にいるとき、ハンスは学校や親の威圧感を忘れることができたのだろう。今まで友人と遊び、語り合うことがなかったハンスにとって、ハイルナーと過ごす日々はとても新鮮に感じられたのではないだろうか。私はそのときの彼が一番、「人間らしい」と思えた。

だが、自由を知っていくと同時に、ハンスは規律と勉学、自由と夢想の狭間で揺れていく。エリートという肩書きを汚さぬように生きてきた彼は、非難されないようにと、いつもどこかで怯えているように思えた。ふつうなら失敗をしても、やり直しがきくかもしれない。しかし優等生の彼は、少しでも失敗すれば周囲から失望される。それは綱渡りのようなもので、彼は周りの期待に応えたい自分と、自由への憧れを抱くもう一人の自分との間で板挟みになってしまったのだ。そうなれば当然、脆くも精神は病んでいき、身体をも虫食まれてゆく。だからハンスは、学校を辞めざるを得なくなったのではないだろうか。

故郷で機械工として新たな人生を始めようとするハンスだが、つかの間の恋は無様に破れ、酒に酔いしれて川に落ち、死に至る。優等生として生きてきた彼の結末は実に哀れだと思った。今まで必死に積み上げてきたものを、活かすことなく投げ捨ててしまったように見えたからだ。

読み上げた後に感じたことは、エリートの彼は私と「同じ人間」であったということだ。ハンスは勉強と、周りの払いきれない圧力という「車輪」に巻き込まれたのだ。自分を取り巻いてきた者たちの眼差しが、期待から段々と冷たいものに変わっていくとき、彼は文章の中で、私に助けを求めてもがいているようにすら見えた。「先生、友人、家族、全ての人から愛情を受けたい。特別なものだと思って欲しい。」そう訴えかけるような姿は、今を生きる私たちと全く変わらない、「彼」の本当の姿のように思えた。

思春期という様々な思いが交差する不安定な時期に、数々の重荷を負っていくことは、とても過酷なことだ。ともすれば、自分の可能性を自ら失い、壊してしまうことにもなりかねない。この作品を通して、ハンスは私にそんなことを教えてくれたように思う。